

生涯学習情報誌

Life Learning

6 2021
Jun.
NO.370

直前にマスクを外し短時間で撮影しています。



2020 (令和2年度)

50歳以上「博士号取得支援事業」

選考決定証授与式



冒頭で理事長・横川浩からご挨拶。

2020年度・博士号取得支援事業合格者の選考決定証授与式が、2021年3月25日、東京・虎ノ門の生涯学習開発財団事務所にて行われた。

授与式では、今年の申請者はコロナ下でも研究のレベルが高く、選考に苦労したことなど、張競選考委員長から総評があった。

財団理事長・横川浩は日本陸連会長でもあるが、「陸上競技においては、山は高く裾野は広くが目標。合格した皆さまは、生涯学習を広げる生き方をされ、研究では高い山を目指しておられる。これから後進の目標となるようご活躍いただきたい」とご挨拶した。

●合格者と研究テーマ

芦川敏洋 (62歳)

「地域経済の成長可能性（都道府県別・資本ストックと潜在GDPの推計を踏まえた実証分析）」

葛岡功弥子 (52歳)

「と畜場の枝肉冷却工程における微生物危害制御に関する研究」

関口 浩 (66歳)

「聴覚脳神経学に基づく重畳音声分離再構成に関する研究」

中島みゆき (55歳)

「災害復興における「尊厳」とコミュニケーション——石巻市大川地区の時間、記憶、ガバナンス——」

永森和子 (52歳)

「1910～1930年代の日本文学におけるモダニズムの研究」

福岡隆夫 (63歳)

「金ナノ粒子の自己集合化異方性構造の創製と応用」

森山 茂 (61歳)

「マウス胎仔の腸管上皮における細胞数と発生過程の数理表現に関する研究——マウス臓器のマスター遺伝子発見に関するmRNAの網羅的解析と遺伝病の起源、原因説明——」

(五十音順、年齢は授与式当日)

2020●「博士号取得支援事業」 選考決定証授与式



選考の言葉

選考委員長 張 競
明治大学教授／博士(学術)

本財団の博士号取得支援事業第11回の募集は昨年の年末に締め切れ、全部で85名の応募がありました。一次選考では選考委員会により15名の候補者が選び出され、2月12日、第一次合格者の面接が行われました。コロナの影響で、二次選考の面接はオンラインで実施されました。はじめての試みであるにもかかわらず、皆様のご協力で無事に行うことができました。第二次選考委員会による最終選考の結果、7名の合格が決定されました。

振り返れば、過去の一年はコロナの影響で、資料やデータの収集、現地調査や実験など研究活動に大きな影響を及ぼした。そのような厳しい状況の中でも、困難にめげず、博士号の取得を目指して努力している応募者の姿に、横川浩理事をはじめ、選考委員一同は深く感銘を受けました。

今年も各分野において優れた研究業績を挙げた応募者が多くいました。しかし、採用枠には限りがあり、最終合格者を絞らざるをえませんでした。選考委員にとっては例年以上に難しい判断でしたが、惜しくも選に漏れた方は一層精進し、来年以降も応募するようお願いしています。そして、めでたく合格した方はますます努力し、一日も早く博士号を取得するよう、選考委員一同は心より期待しています。

皆様のご活躍を支援し、生涯学習を一層推進するために、選考委員一同は皆様とともに、本事業のますますの発展のために微力を尽くしたいと思います。



コロナ対策のため短時間だったが、自己紹介と交流が行われた。



85名の応募者の中から選ばれた方々。

2020

博士号取得支援決定をうけて



芦川 敏洋
62歳

静岡県立大学大学院
2021年3月博士号取得
静岡県経営管理部参事
浜松学院大学・静岡大学
非常勤講師

地域経済の成長可能性
(都道府県別・資本ストックと潜在GDP
の推計を踏まえた実証分析)

■研究目的

静岡県職員として長年培ってきた「地域経済分析に関する見識や成果」を博士論文にまとめたいと、在任中から後期博士課程に進んだ。日本経済は47都道府県の集合体であり、「地域経済の成長可能性」を分析することが「日本経済の再生」につながると考える。国レベルで議論されていた「資本ストックの伸びが経済成長に及ぼす効果」や、成長に関する「地域間格差が収束するのか、発散なのかの論争」について、全国47都道府県ベースでの検証に取り組んだ。そのために、「資本ストックデータ」として、県民経済計算のフローデータを用いて「資本形成累計額」を積上げ算的に試算することや、47都道府県の潜在GDPの推計作業に挑んだ。

■合格のコメント

繁忙な公務と並行して論文を仕上げるのは予想以上に大変で、5年かかったが無事博士号を授与された。学問的専門領域で認められ、確たる自信がついた。今後も研究活動が続けるが、学会などでも臆することなく発表ができる。財団のこの支援事業では、自分と同様に博士号取得を目指す社会人が多くいることを知り、大きな励みとなっている。定年退職後2年間は、再任用で県の職員研修所で人材育成担当もした。後輩諸氏の励みになればうれしい。



葛岡 功弥子

52歳

岐阜大学大学院
連合獣医学研究科
豊橋市役所健康部

と畜場の枝肉冷却工程における 微生物危害制御に関する研究

■研究目的

食品衛生行政に携わるなかで課題であった食肉の安全性確保につながる研究。食肉の細菌汚染は深刻かつ広範な健康被害を招くが、これを未然に防ぐには、と畜場における枝肉の処理工程での細菌等による汚染のリスクを制御することが重要である。さらに食の国際化に伴い、と畜場においても国際的な食品衛生管理手法である HACCP に基づく管理が義務付けられた。その運用を成功させるには、国際標準に適合するだけでなく、国内と畜場の現場実態も考慮することが求められる。以上の背景から、国内のと畜場における微生物危害制御のための HACCP 導入に向けて、実行可能な衛生管理手法を数理統計学（グラフィカル・モデリング及び混合効果モデル等）により構築することとした。

■合格のコメント

食品流通の国際化に伴い、国外の知見も求められるようになった。博士課程に進んだのは情報を精査・発信する能力を強化するためでもある。50歳代の社会人大学院生であるからこそ、現場の要求に直結した課題を取り上げ、実態に即した解決方法を導きだすことができると考えている。本支援事業で評価していただき、また他分野で最先端の研究をされる方々と交流もでき、今後の研究に向けて大いに励みとなった。



関口 浩

66歳

東京大学大学院
工学系研究科
先端学際工学専攻

聴覚脳神経学に基づく 重畳音声分離再構成に関する研究

■研究目的

霊長類や哺乳類は、外部から様々な音が同時に聞こえる重畳音声から、必要な音だけを聞き分ける能力があるが、それを人工的な機械で行うのは非常に難しい。現在、自動会議録作成システムや聴覚支援システム等が必要とされているが、従来の方法では分離性能は十分である。本研究では、人間の聴覚神経のメカニズム（音声特徴量の時間推移類似性に基づいて話者毎の聴覚情景物体に分離する）に注目。このメカニズムが上手く動作するためには、音声特徴抽出量にスパース性（少数の要素で多数の要素からなるシステム全体の振る舞いを表現すること）がある、との仮説を立てて検証する。これを重畳音声分離アルゴリズムに用いることで、分離した音声の品質改善が期待される。

■合格のコメント

大手電機メーカーに就職し、当最も最先端だった、人間の視覚や聴覚の認知機能とデジタル技術を融合する分野を面白いと感じ、ずっと関わってきた。定年を契機に、近年発達している機械学習を用いて、認知機能の分野を深堀りしたい思いがふつふつと湧いてきて、研究の世界に入った。シニア対象の奨学金は少ないのでありがたい。応募総数を聞いて競争率の高さに驚いた。合格したことを光栄に思う。



中島 みゆき

55歳

東京大学大学院
学際情報学府
毎日新聞社 記者
（一社）長面浦海人理事

災害復興における「尊厳」と「コミュニケーション」——石巻市大川地区の時間、記憶、ガバナンス——

■研究目的

大災害で被災した人々が、納得感と安心感をもって生活再建できるには何が必要か、コミュニケーションという視点から研究。石巻市大川地区は東日本大震災で甚大な被害を受け400世帯が内陸移転を余儀なくされた。この地域には震災前に訪れ、豊かな自然に根ざした暮らしに共感を持っていた。震災後も通い続け、「参与観察」という形で復興過程を見守っている。修士過程では集団移転や防潮堤など主にインフラ復旧をめぐる合意形成について課題をまとめた。博士研究ではさらに、地域社会の維持・再建に必要な要素という観点から、地域の人々とジオラマやアーカイブを作りつつ、記憶や伝承をめぐる合意形成について研究している。

■合格のコメント

被災地に関わった当初は記者の視点だったが、復興が長期かつ複雑なプロセスであることに気づき、研究という形で構造的に考えたいと大学院に入学した。学部卒業時に大学院進学を希望していたが叶わず、20年の記者生活と子育てを経て通った大学院は、新鮮で楽しかった。松田妙子前理事長が元NBCの記者で、子育て後に博士号を取得したことに勇気づけられる。論文と並行して、災害復興や人口減少時代の地域課題解決に寄与する一般書も執筆したい。

2020

博士号取得支援決定をうけて



永森 和子

52歳

東京大学大学院
人文科学研究科

1910～1930年代の 日本文学におけるモダニズムの研究

■研究目的

1910～30年代、東京の町並みが近代化し、映画等の新しい娯楽が浸透していくにつれて、人々の感性が変化した。従来とは異なる視点や価値観から日常を眺めることで、自己の認識や在り方も変化していく。その様相を文学から考察する。具体的には、谷崎潤一郎の最初期の短編「秘密」に現れたモダニズムの要素が、その後の谷崎や他の作家の作品にどのように受け継がれ展開していくのかを追っていく。個々の作品を繋がりの中に位置付けることで、全体から見えてくる日本文学のモダニズムの特徴を見出すことが目的である。さらに、自分の研究を英語で発信することで、海外の研究者とつながり、文学研究の可能性を広げていきたい。

■合格のコメント

若い研究者と競合せずに支援を受けられる事業と知り、応募した。最初に進学した大学では卒業のための最低限の勉強しかしなかった中で、再度学び直す機会が欲しいと考え、30代半ば過ぎに再び大学に入学。比較日本文学の授業で、アメリカ人の准教授の江戸川乱歩の講義が面白く、卒業論文は江戸川乱歩。大学院に進み、谷崎・芥川・佐藤春夫の探偵小説に関する論文を修士論文として提出。博士論文は卒論と修論をより大きな視点で展開する。



福岡 隆夫

63歳

京都大学大学院
工学研究科
同非常勤研究員

金ナノ粒子の自己集合化異方性構造の 創製と応用

■研究目的

金ナノ粒子は周りの電子が振動することで赤や紫に発色し、金ナノ粒子が凝集すると表面増強ラマン散乱という、光を増強する効果が出現する。本研究では、その作用を準安定的に合成・制御することに成功。ナノサイズのセンシングや目に見えないナノ情報素子として、表面増強ラマン散乱を簡便に活用できるようになった。想定する実用例としては、偽造医薬品の流通防止。10ナノグラム（ナノは10億分の1）程度の微小な金の粒子を錠剤やカプセルの表面に印刷し、センサーによる判別や商品情報の読み取りを可能にする。農産品の「日本ブランド」を守る技術としても期待する。今後、「デジタル情報と現実世界をつなぐ鍵となる技術だ。

■合格のコメント

子供のころから色の変化する化学実験が大好きだったが、進学や就職ではうまく行かず、さんざん壁や回り道に遭ってきた。もう止めようと思ったが、なんとか続けられる研究資金が得られ、今回も「続けなさい」と背中を押された思いだ。以前、自分と同年同月同日産まれと同僚がリストラされ、会社の屋上から飛び降り自殺した。人が絶望するような社会は負しい。豊かな社会であればと悔しく思う。付加価値が高い技術で社会を豊かにしたい。



森山 茂

61歳

島根大学大学院
医学系研究科
森山技術開発研究所(株)
代表取締役

マウス胎仔の腸管上皮における細胞数と発生過程の 数理表現に関する研究—マウス臓器のマスター遺伝子発現 に関するmRNAの網羅的解析と遺伝病の起源、原因解明—

■研究目的

52歳で修士課程に入った際、教授から白羽の矢が立った。マウスの胎仔の臓器が発達していく過程を数値的に解明しようという。生物好きになうえ、ロボット開発技術に長年携わるなど、物理と数学が得意だったためだ。修士課程では、マウスの体がどれだけ大きくなるかを数式で紐解いた。博士課程では、腸管のひだの数が場所によって違う点を、数式により解明している。実験で細胞の数を数えて、予測を立てて、数式で証明していく。細かい作業もあるが毎日楽しくて仕方ない。マウスの腸管を切り出すのも自分でやらずにもらえない。これらの研究を進展させていくことで、人間の遺伝病の病原をなくしていける可能性も見える。

■合格のコメント

奨学金とバイトで高専まで行き、陸上部キャプテンで国体強化選手にもなった。就職した電機メーカーでは先端技術を競った。でも幸せではなかった。8歳ごろまでは、野山を駆け回り、動物図鑑やシートン動物記を読み、好きなことしかやってなかった。それを思い出したのは52歳。これからは好きなことだけをやりたいと決めた。声に出してみたら、出会いや援助の手も現れた。財団の支援も生かし、研究を通して人々の幸せや世界の平和につなげたい。